「私の少年時代」（抜粋）　大学３年生　森田重晴

昭和３年から昭和８年までの隈川地域の農業と青年団活動

昭和３年３月、隈川尋常小学校を無事卒業した。私が13才の春である。

元小学校教員であった父は、私を師範学校（現在なれば大学である）に入れて、学校の先生にしたいという夢があったらしい。その頃、私の家は、未開の地に農業者としてうっそうたる隈川の森林の中に畑を作って仕事に就いて13年目に入っていた。５町歩余りの畑はできており、北見特産のハッカを全面耕作していた。しかも父は、隈川の部落を作り、農事実行組合づくり、さらに産業組合を発展させねば農家の将来はないと、毎日のように部落内を、また常呂村内を走り回っていた時期であった。従って畑の仕事は、母１人にゆだねられていた。母としては猫の手もほしい心境であった。そんな折、私が卒業したので早速畑に連れ出された。畑仕事が嫌いではなかった私は、いつの間にか母の仕事の良い話し相手になっていた。そして太陽の光の下にすくすくと育っていく野菜や主作物のハッカの生育に楽しみを持ち始めてきた。

しかもその頃、わが常呂村は大正８年、10年、11年の常呂川の大洪水をはじめ、決まったように畑が冠水するという不安定な農業であった。

その保護策として、国が隈川に沿った国有地約160町歩余りを、これらの農家を優先して払い下げ、残りを地元農家の希望で払い下げをした。そんなことで我が家も昭和３年６月に４町歩の払い下げを受けた。これを５年間に開墾しなければならない。こんな時でもあり、私は農家の長男として畑仕事をするのが当然となった。私を上級の学校にあげるという父の夢は消えた訳である。母と２人、毎日のように一鍬一鍬と新地を耕すことのみが続いた。主作物のハッカに力を注ぎ、他は芋やイナキビ、豆など自家の食料づくりであった。

昭和５年４月、私が15才の春、ほとんど義務的に村の青年団（注：大正９年６月11日隈川青年団結成・昭和３年２月13日隈川女子青年団結成）に入らされた。当時の青年団とは15才から25才までの若い者たちの集まりであって、団長、会計など役員のもとで団員は30人あまりいたようでした。

こうして立派に組織立てられた若者たちの修養団体が村内各部落にあり、合同して常呂村連合青年団（注：大正11年７月２日結成）となっていた。

佐藤満三村長の時代である連合青年団の活動としては、剣道大会・弁論大会・陸上競技大会・カルタ大会などで、他はそれぞれの青年団でそれなりの行事が行われていた。

隈川の青年団では、毎年11月から農閑期を利用して翌３月まで冬期間夜学校が開催され、小学校の校長、浜田義則先生（注：初代校長　昭和６年４月８日～22年11月10日）が毎夜教鞭をとってくださっていた。広い校舎の片隅にほのくらいランプの下で寒さに震えながらの勉強であった。上級の学校に入ることのできなかった私たちのせめてもの勉学の場であったのだ。

剣道も弁論もカルタを取るのも入団したばかりの私にはどれも初めてであり、青年団の先輩たちに教えてもらうのが嬉しくて、楽しい毎日が続いた。

長男であった私に続いて２人の妹も小学校を終えて農業の手伝いであった。当時どこの家でも同様で、小学校を終えたら必ず家業を手伝うことが当然とされており、若い者が町へ出て就職する者は１人もいなかった。

当時の私には分からないままで、これが当たり前と思っていたけれど、当時は「大学は出たけれど職はなし」と流行語にもなった４人に１人は職にあぶれるという厳しい就職難の世の中であった。大東京の街に若い失業者が100万とも150万人とも言われ、日本の経済は昭和２年の金融恐慌、同じく４年の金解禁、そして同年10月の株式市場の大暴落により、かつて日本は経験したことのない大不況に突入していたのだ。（略）

東北及び北海道は、６年、７年と２年連続の大凶作で稲籾も取れない水田地帯の悲惨さであった。

しかし、前にも述べたごとく北見特産のハッカの全盛時代であったので、私たちハッカ耕作農家は、冷害により多少の減収ではあってもハッカの価格に支えられ、この大凶作もよそ事ようにしか感じられないのであった。

かかる日本の情勢の中で私の少年時代は終わり、18才の春を迎えた。

常呂町高齢者教室『昭和63年度オホーツク大学文集　トーコロ』
（平成元年３月発行）掲載